

# 史遊会通信

NO. 179  
平成21年  
9月5日  
発行

事務局  
03-3712  
0651  
下山田方

## 七月座談会要旨

### 「史遊」を 読 ん で

会の開始に先立って、本日の司会森下征二さんから参加者全員に「史遊」執筆者別発表内容表（一号～二十二号まで）が配付された。森下さんは先ず同一執筆者についての読後感想を話し合っていこうと提案し、座席順に、まず鯨さんを発言者として指名した。

以下発言順に掲載する。

#### ●鯨遊海さん

清輔道生さんの第十三号「邪馬台国女王」の一、蛇鈕の金印のなかで「蛇は南蛮の国（越・滇など）に対して用いられているので、「蛮」の字の虫は蛇を意味しているこ

### （記録） 中山 喬 央

とが判る。そうすると、東夷の倭人のルーツも南蛮にあったと推測することができよう」とあり、自分が考えている日本人起源南方説と符合するので共感を覚えた。ちなみに自分としては、金印は偽物だと思っている。

#### ●山本鎮雄さん

清輔さんの第六号「『学問のすすめ』の冒頭文出典は『東日流外三郡誌』か」は、清輔さんも末尾に和田家の返書として、「和田家の者で福沢諭吉に接触した者はなく、件の文言は全く偶然の一致と考える、との見解が述べてあった」と紹介しているが、これは全くの偽書であったことが立証

### 例会のお知らせ

#### ◎ 9月例会

日時 平成21年9月30日（水）

午後6時～8時

会場 目黒区民センター 7階

社会教育館 第2研修室

講演 鍋屋次郎氏

テーマ「横浜開港百五十年の光」

自由執筆は平山善之・中込勝則・

瀧澤中の諸氏 締切り9月30日

◎ 9月例会は第5水曜日です

#### ◎ 10月例会

日時 平成21年10月28日（水）

午後6時～8時

会場 目黒区民センター 7階

社会教育館 第2研修室

講演 隆恵氏

テーマ 未定

自由執筆は三戸國道夫・柴田弘武・

山本鎮雄の諸氏。

締切り10月31日

されている。福沢諭吉は、幕府の外国奉行翻訳方に出仕した経験をもつ事からも明らかのように、外国人の書いた修身法典をネタ本とはしたが、彼等の神とは異なる日本古来の八百万の神を天とした国民平等、独立自尊を説く『学問のすすめ』を書いたのだ。福沢はたいしたものので、『東日流外三郡誌』などは思想的背景が全く違うのだ。

●諸橋奏さん(友の会)

清輔さんの第十三号「邪馬台国女王」に触れ、魏志倭人伝に出てくる春日市の奴国、前原市の伊都国、唐津市の松慮国の三つまでは発掘で確定しているが、投馬国以降がわからない。しかしこれは丹波・但馬のことで、耳学問で聞き間違えたのだという説を展開。話は変わるが私は広島県・福山市の南にある鞆ノ浦の保存運動にも関係したが、邪馬台国当時の貴重な遺跡が、次々と開発により其の姿を消して行く事は寒心に堪えない。

●太田精一さん

清輔さんの第十号「和氣清麻呂外伝(2)赤坂彦の自害」に出てくる日本固有の古代文字で構成された『ホツマツタヘ』について、かつて私は古田会に入っていて、秘め

られた日本古代史、古代の日本固有文字として勉強したことがある。

●新井宏さん

古田氏が推薦した『東日流外三郡誌』は偽書となった。清輔さんは「藩許得難く他見に及しては死罪を招く事あり」と紹介しているが根拠がない。

●三戸岡道夫さん

千坂さんの第二号の「米沢藩を再建した上杉鷹山」、第九号「律儀を通した『直江状』」、第十二号「戊辰戦争 奥羽越列藩同盟異聞」は、上手に結びつけられている。

上杉家最後の殿様上杉茂憲は明治十四年に沖繩県令となったが、配下の行政官に人材が不足し、他国の家老を連れていくしかなかった。当時沖繩県は各地域毎に情勢が異なり統治が難しく、上杉景勝や上杉鷹山がやったように、県令の意向を徹底させようと県政改革の建白書を出したが、時の政府に認められず二年で岩村通俊に交代させられた。其の原因が「史遊」第十二号に掲載されている。「米沢藩はどうしても鎮撫軍の片棒を担いで会津藩を攻める事ができない理由があった」。すなわち会津の味方をしたので、上杉がいじめられ、難しい

沖繩県令にさせられ、そして県政失敗の責任をとらされたのだ。

この時期(明治五年)に、東北の酒賜県(現山形県南部)と山形県の参事に任命されたのが幕臣であった関口隆吉であった。

そこでの手腕が認められ関口隆吉は明治九年には、なんと長州閥の本拠、山口県令となり、前原一誠の乱を治め、明治十四年には元老院議員となった。更に明治十七年に静岡県令を命じられるや、徳川慶喜の後援も得て、静岡県の県政に大いに手腕を振ったのである。

●千坂精一さん

奥羽越列藩同盟相手の交渉は、下位の公家がトップでは力不足で駄目だった。黒田清隆と品川弥二郎が、そのまま参謀でいれば、長岡と会津はあんなことにはならなかった。斬殺された世良修蔵みたいな男をのさばらせたのは残念だ。

●太田精一さん

NHKの大河ドラマ「天地人」と千坂さんの理論がびつたり一致している。景勝と鷹山は小派閥出身ということで良く似ている。景勝は六日町の上田長尾の人材しか登用できなかったし、鷹山は江戸詰の革新派

を頼るしかなかった。  
 魔山の出た日向高鍋藩と上杉はどんな繋  
 がりがあったのですか。

●千坂精一さん

上杉魔山は日向高鍋三万石の藩主秋月種  
 美の二男だったが、上杉重定が母の従兄に  
 当るところから、養嗣子に選ばれたのだ。

●太田精一さん

先輩方はどなたも文筆家で、しかも足で  
 歩いている方が多いと感じた。また思い入  
 れの激しいのも史遊会の特徴だと改めて痛  
 感した。高橋由貴彦さんの第九号・第十号  
 「イペリア二国の香辛料争奪劇と日本(一)  
 ・(二)」にはヨーロッパと日本の文化交  
 流史のなかの香料が、豊富な知識に基いて  
 書かれているが、ポルトガル、スペインが  
 日本の統治に失敗したのは、双方が喧嘩を  
 したからだと判った。

ここで司会者から、未発言者を中心に、  
 一人三〜四分で感想を述べる形式に改めた  
 ことの発言があった。

●鍋屋次郎さん

松本剛さんの第十二号「横浜山手外人墓

地に眠る鉄道創業期の技術者たち」に感銘  
 を受けた。

●相原精次さん

この『史遊』を作っていただけで有難い  
 し、懐かしい。ここには限りない思い出が  
 ある。沢史生さんの第三号の「おどろおど  
 ろしい話」、第五号の柴田弘武さん「俘囚  
 はなぜ移配されたか」など修験道、鉄など  
 隠された日本史が書かれている。子供向け  
 のお化けの話を含む日本の御伽噺は、裏の  
 意味のある騙りごとだ。砂鉄だ、産鉄だ、  
 山の民だ、あそここの山で金が採れた……と  
 いうような話が御伽噺になっているのだ。  
 そして文覚上人は東北・みちのくの黄金を  
 探査して、そして消されたのだ。

私は第二十四号で「すずめのお宿」考を  
 書いているが、「雀」にこだわったきつつか  
 けは、横浜市栄区に「小雀町」と言う地名  
 があって、其の由来を調べようと思っ  
 たからである。栃木県に雀宮村があり、そ  
 この雀神社には、一条天皇から東の奥へい  
 って歌枕の地を探してまいれと左遷された  
 藤原実方中将の霊が祀られているが、彼は  
 枕草子の作者清少納言の恋人であった。

話は変わるが「雀の森の雀長者」の話は、

「雀」が黄金の仲介をする話であり、舌切  
 り雀、お宿はどこだ、と尋ねても、舌を切  
 られた雀は簡単には黄金のありかを教えて  
 はくれないのである。

●諸橋奏さん(友の会)

中村整史朗さんの第五号「田沼意次の悪  
 名考」が印象深かった。現在高校の教科書  
 では田沼意次を誉めて書いている。彼は血  
 筋が悪かったので、敵も多かったのだ。

●千坂精一さん

中村整史朗さんは『間宮林蔵』を書いて  
 史遊会に参加された。

●藤田隆彦さん(友の会)

自分は富山の出身なので、遠藤和子さん  
 の第三十一号「佐々成政の実像」が大変面  
 白かった。又、相原精次さんが第二十四号  
 「すずめのお宿」考のなかで触れておられ  
 る佐々成政の埋蔵金伝承も「佐々」の名と  
 共に気になっている。

現に越中では加賀藩により「七かね山」  
 と呼ばれた鉱山が稼業しているが、その内  
 容は、古い時代の発見と伝えられている魚津  
 市にある松倉・河原波金山の他、同じく魚  
 津市の虎谷金山、中新川郡上市町の下田金  
 山、上新川郡大山町の亀谷銀山、上新川郡

大沢野町の吉野鑑山、寛永年中に開坑した長檜鉛山である。

●由利潤一さん(友の会)

廣瀬守さんの第十四号「私なりの佛教」に非常に興味を持った。

自分の宗派は、室町中期まで寺勢が本願寺をしのいだ浄土真宗仏光寺派で、戒名もつけてもらっている。家内は日蓮宗。京都や奈良の仏像を見たり、道端の地藏さんを見るのが好きだ。

●新井宏さん

加藤誠さんの第二十号「枯れかけたトマトの風景」、日本が富裕のなかに貧困を持っていたことを身近な問題のなかでとてもよくとらえていると思った。

●隆恵さん

沢史生さんの第三号「おどろおどろしい話」を読んで京都府の南部に本拠を構えた秦氏の存在を思い出した。伏見稻荷は産鉄の神から金そしてマネーの神にかわった。

●山本鎮雄さん

源流を読まれたという感じ。井戸を使う人は井戸を掘った人のことは忘れてはいけない。この本は「紙碑」だと思う。書かれている分野は、日本のグローバリゼイシ

ョンの影響を受けて、現在の方が海外分野が増えているように感じた。

自分としては墓碑はいらない。「紙碑」を創るのが生きがいである。

●長島節五さん(友の会)

このメンバーのなかでは四、五番目に古くなった。何時の時代にも興味がある。

清輔道生さん第六号「『学問のすすめ』の冒頭文、出典は『東日流外三郡誌』か」に一番興味を持った。

●荻野得男さん(友の会)

入会して約一年になる。歴史が好きで、時代毎に人々が何に関心を持ち、好き嫌いがあったのかを考えるのが面白い。

若城希伊子さんの第二号「歴史と文学のあいだ」―その緒口として「文学は歴史に先行する」ということについて―に共感を覚えた。文学と歴史の関係については源氏物語を勉強しなければいけないとあらためて思った。

●平山善之さん

蜂矢敬啓さんの第八号「東夷」第一章補遺「縄文から有史時代へ」―坂東武士の祖先は縄文人―と、同号の「武威七党幻想」に強い共感を持った。

話は変わるが東京の日野と千葉県の旭市の間に伏流水があったという説がある。その他、蜂矢敬啓さんの「鎌倉街道と八幡神社」(創刊号)も面白く読んだ。

●柴田弘武さん

倉田金昇さんの第二十号「燈籠に捧ぐ」、第二十二号「相馬の金さんの作者」―岡本綺堂50回忌に因んで―が、ひょうひょうとした筆者の人情が思い出され、書き方も大切にしているということ学ぶべき点が多かった。

話は変わるが、沢史生さんが彩流社から刊行した『鬼の大辞典』が印象に残っている。社とセックスを根拠にして森羅万象を描いている。物凄い博識の人だった。

司会者の森下征二さんより、各自が独特な視点から、それぞれが掘り起こした問題を話し合った本日の座談会は、有意義なものであったとの感想が述べられ閉会した。残りの第二十三号から四十三号までの読後感想会は追って日程を発表する。

\* \* \* \* \*

自由執筆  
史遊会と楽史味会に感謝

(友の会) 正木 清幸

懐かしい「史遊」合本を拝受し感涙にむせぶ私に事務局の下山田さんから「感想文を出してよ」とお声がかかった。なにしろ史遊会の発足は二十七年前のこと、最近認知症の気配もあり、年月、人名、地名等に誤りあればご叱正賜りたい。

▼楽史味会が史遊会とのご縁の始まり

明治乳業の近藤氏から「俺の属する歴史の会(楽史味会)が始めてバスで一泊旅行をするのだが参加しないか」との誘い、仕方ない、今回限りと腹を決めて参加した。行先は稲荷山古墳と畠山重忠の館跡。講師はいずれも史遊会の今野・蜂矢両氏。

先ず、埼玉県立博物館で、一九六八年に古墳から出土し、一一五文字の金象嵌の銘文が発見された鉄剣を見る。鉄剣の銘文は約一五〇〇年前の雄略天皇時代のもので、歴史の奥深さに感銘した。次に行田市のさきたま古墳群内の前方後円墳々々に登り、副葬品の出た墓を見学。考古学に無縁の私

には鮮烈な体験であった。翌朝、朝食前に起こされ大広間で蜂矢氏の鎌倉街道の講義を伺う。続いて宿を出て、畑の中に残る鎌倉街道の跡に立ち雑木林となり果てた風景に嘖然とした。今野氏の「歴史は勝者の歴史、歴史には裏がある。それを立証するのが歴史の面白さだ。史遊会は楽史味会の親元で、今後講師は史遊会から出す」との事。私はこの旅ですっかり歴史に嵌まってしまい、一回限りどころか子会社の総務部長の地位を利用し社員中十二名を会員にした。

▼多士済々、史遊会思い出の方々

「史遊」創刊号の会員紹介欄で、⑤の所属団体を楽史味会と掲載されているお方は、今野・蜂矢、広瀬、酒井、若城の五氏である。第一回のバス旅行には今野・蜂矢、広瀬三氏が史遊会から参加。若城氏も取材が主だが、よく参加された。八丁堀の月例会には出来る限り出席した。楽史味会の女性連は後部座席で傍聴していたが、私語が轟しくなると今野氏が立ち上がり、「先生は真剣に講演されているのです。静かにしなさい」と大声で注意された。楽史味会の会合

は三月に一回位であり、久し振りに逢ってついサロン気分になるらしい。流石の今野氏も閉口頓首だ。清輔氏が開会の辞を指名されたことがあったが、司会の今野氏が、「清輔さんは話が長いので出来るだけ短く、三分以内でお願いします」と言う。白い顎鬚を撫ぜながら清輔氏の宇佐八幡宮の話は止まらない。今野氏が制止に掛るが平然。会場は大爆笑である。林氏の講演は宮中のお話で珍しい。宴会でのハーモニカはそのお姿とともに忘れがたい。千坂国家老(?)の青春は予科練に燃えたいらしい。倉田金昇師匠の高座(講演)は鳴り物入りで腹を抱えた。台風の中で淡路島取材旅行では、柴田氏がタクシーで別行動。聞けば日本中の別所を踏査されている由、感銘した。

一九八六年十月、外谷正之氏のお世話で韓国旅行があった。小西行長軍の侵略コースを辿るバス旅行であったが、この旅行で私は韓国にもすっかり嵌り込んだ。まだまだ立派なお方が多数居られるが、紙面が尽きたのでこれでお許し願いたい。私は史遊会のお陰で歴史に目覚め多くの素晴らしい方々に巡り合い有意義な人生を送り得た事に厚く感謝申し上げます。(完)

自由執筆  
「牛乳」と「明治維新」

(友の会) 諸橋 奏

日本人と牛乳との出会いは、六世紀中葉欽明天皇(在位五四〇〜五七一)の頃に、百済の国から伝来した時であるという。

五五三年に「易」や「曆」などと一緒、百済の博士が大部の医学書も持って来たが、この中には牛乳の薬用効果と共に乳牛の飼育方法も詳述されていた。並行して乳牛も渡来したのであろう。

その約百年後の、大化の改新の年(六四五)、日本に帰化した博士の子孫が、時の孝徳天皇(在位六四五〜六五九)に牛乳を献上したところ、「結構なもの」と賞味されたと伝えられる。これが日本人の牛乳摂取の最初とされる。続く平安時代(七九四〜一一九二)、牛乳は朝廷や貴族社会で愛用されたが、武士階級が台頭し、戦乱が激しくなると、大動物の飼育は牛よりも戦力になる馬が中心となり、やがて鎌倉時代末期には牛乳の食文化は完全に消滅した。日本に牛乳を利用する食文化が再登場す

るのは、幕末・明治の時代になってからであった。一八五四年の日米和親条約で、三百年に及んだ日本の鎖国が幕を閉じると共にやって来た、「文明開化」の風潮に乗ったことといえよう。

日本は、慶応四年(一八六八)九月八日「明治」と改元した。誕生した明治新政府は近代国家創出のため、さまざまな改革をした。中でも生活文化、衣食住の欧風化は、人々に直結する改革の先兵であった。特に牛乳の飲用は、その栄養価値が欧米並みの体力・知力延びには国力増強につながるとの思いから、酪農・乳業振興には真剣であった。牧場経営、搾乳処理技術、牛乳製造・販売事業については、横浜の前田留吉が文久年間(一八六一〜一八六三)にオランダ人から学んだのが草分けという。維新前夜のこと。改元早々の明治三年、松本良順(翌四年順と改名)が旧旗本の阪川當晴と赤坂で「牛乳搾取業」を始めた。良順は同時期に早稲田で蘭時舎病院を設立した著名な医師であった。良順(一八三二〜一九〇七)は順天堂を創設した蘭方医佐藤泰然の次男(嘉永二年幕府医官松本良甫の養子となる)で、戊辰戦争では幕府軍医として転

戦した。彼は翌四年に新政府の兵部省軍医頭となったのをはじめとして、六年には初代陸軍軍医総監に、後には貴族院議員、男爵になった。

この頃の牛乳飲用はかつての奈良時代の如くで、四年には「天皇(明治)は毎日二回づつ牛乳を飲まれる」旨、新聞掲載されるなど、一部の人のものであったことが分る。そして新政府の酪農・乳業発展のための努力もまた知ることが出来る。

かくて、五年には男爵松本巨善、六年には子爵榎本武揚が盟名の男爵大島圭介らと共に牛乳搾取業をはじめた。これらの先覚者に続いて、後に政府の要人となった人々が次々に参入することとなる。十年頃までに同業に携わった人物を列記すると、公爵松方正義(第四代内閣総理大臣) 公爵山形有朋(第三代内閣総理大臣) 子爵由利公正(明治四年東京府知事) 桑名藩主松平定教(曾孫定純が子爵に) 伯爵副島種臣(参議・外務卿・内務大臣) これらの事例から明治新政府の指導者達がいかに新時代に向っての指針を示し、形振り構わず「陳より始めよ」と率先垂範、志の実現に邁進したかを見ることが出来る。

小さな旅  
車窓から見る山々

相原 精次

1 車窓に見る山々

新幹線に乗って車窓から移りゆく景色を眺める、となると、おのずから遠い風景が中心である。列車が速いため、どうしても遠くに連なる山並みを見ることになる。東海道であれば、やはり富士山が、今日ほとんどなふうに見えるかな、と見てしまう。

その富士山、新横浜駅を過ぎる頃から手前の丘陵などの合間から、ときどき顔を見せるようになる。静岡県に入って沼津駅、そして新富士駅を過ぎるあたりまで、微妙に姿を変えて富士山は目を楽しませてくれる。でもこれ以降は、背後の風景となるため自分のいる車窓から消える。

ところで、東海道新幹線での風景は富士山の姿が見えなくなるその頃から、名古屋駅を過ぎ、岐阜県に入る頃まではあまり大きな変化を見せなくなってしまう。

東京駅から北の方へ向かう新幹線はどうだろう。東北新幹線に乗ると右左の窓から

多くの山々の姿が次々に見えてきて飽きることがない。代表的な山は、かなり遠くから目につき、次第に大きくなり、その山が見えなくなる頃、別の山が姿を見せ始める。東京駅、上野駅を過ぎて大宮へ行く間、

左の車窓からは、かなり遠い風景ながら富士山も見える。大宮を過ぎて、ここでは上越新幹線と分かれることになる。このまま東北へ向かうことにしよう。その頃から右手に筑波山が見えてくる。小山駅を通過する頃はもとより、宇都宮駅のあたりまでもその山容は窓枠の範囲にある。

今述べたのは東京駅から出発した場合の景色の変化なのだが、全く同じあたりを逆に、東京に向かって進んでいる場合、とりわけ、日の沈む時間帯にこのあたりを通過するとき、左右の景色はずばらしい。

宇都宮あたりから左の車窓には筑波山が夕日を正面に浴びて輝いているのが見える。そして、右手には夕焼けしている赤い空の中に、くっきりと富士山の黒い影が浮かんでいるのである。しばらくの間この風景は続く。この「しばらくの間」というのをもう少し分析的に語ると、この風景の醸し出すドラマは、二十分ほどは続くのである。

微妙に、時間そのものの推移、走りすぎの故の視点の移動、この二つの変化が重なりあつて絶妙なスペクタクルが、窓を通した遠い風景の中に展開されるのだ。とりわけ、日の落ち際の時間帯がいい。

さて、また北に向かう車窓に話を戻そう。左手に日光の連山、さらに那須岳、安達太良山と吾妻小富士。北上の駅を過ぎ、蔵王が見え出すと間もなく仙台に着く。さらに、旅を北へ進めることにしよう。

船形山、栗駒山が続く。栗駒山の頂点は秋田県・宮城県・岩手県の境であることを示している。この山の東の麓が平泉である。

新幹線が新花巻駅にかかる頃、車窓右手に早池峰山が見えてくる。ゆるやかな山頂への稜線は、みやびなやさおとこ風である。そして盛岡駅に近づく頃、進行方向左手に岩手山、また右手前方に姫神山が見えてくる。岩手山はどっしりして雄々しく、姫神山は左右に流れる山の稜線はゆるやかで、その山頂にもう一つ小さな丸い頂がちよこつと突き出ている、優しくて美しい。

2 岩手三山のはなし  
さて、この早池峰山・岩手山・姫神山の三山にはおもしろい話が伝わっている。

この三山に加えて岩手山と姫神山の間に、小型ながら山頂を削り取られたかのような台形をした送仙山（うづまきやま）があって、この山もその

## 祝出版

※瀧澤 中著

最新

『政治のニュース』

が面白いほどわかる本』

中経出版

※相原精次 共著

三橋 浩

『東北古墳探訪』

東北六県+新潟県

古代日本の文化伝播を再考する

彩流社

※中込勝則記

中国江南の

『「歴史」と「今」』

を散歩する』

話に加わって、「みちのく民話」は次のように語る。

むかし自然がものを言った頃、岩手山と姫神山は夫婦の山だった。

雄々しい岩手山は周囲からいつも畏敬の目で見られていた。そのため、妻の姫神山は夫が浮気するのではないかという心配ばかりして、何かにつけて嫉妬心を燃やすのだった。岩手山はそんな妻の様子を見るのが嫌で、家臣の送仙山に姫神山を自分の視界から消してしまおうようにと命じた。

しかし、送仙山は姫神山の折るようなまなざしにあって事を進めることはできなかつた。岩手山は怒った。そして送仙山の首をはねてしまった。そのためにこの山の山頂は平になったのだった。

その後、岩手山は姫神山を無視するようになった。そのことを知った早池峰山は姫神山がかわいそうになり、やさしく見つめるようになった。岩手山はそのことがひどく気になりはじめた。自分の思い上がりがあるの始まりであったと気づいて、岩手山は早池峰山に姫神山を返すようにせまった。早池峰山は拒絶した。岩手山はまた怒った。

大噴火した。あたりは溶岩で一変した。

姫神山は岩手山の恐ろしさを改めて知って、岩手山のもとに戻るようになったのだ。それからというもの、岩手山と早池峰山は仲たがいがいたままで、今でも同時に山容を見ることがないということである。

ところで、この三山の周辺には釜石環状列石、湯舟沢環状列石、樺山環状列石など縄文時代の謎の多い石の遺跡をはじめ、かなり多くの古墳も分布しており、古代から文化が豊かだったことを示している。

遺跡の中に眠る主人公たちが日々、喜怒哀楽の中に暮らしていた古いその昔、人々は山々が怒って火柱を上げるのを見、そんな自然と共に会話をしながら生活していたのかもしれない。

みちのくの山々にある多くの伝説の一つを紹介してみた。

※事務局より

▼会員の活動

新井宏氏

21年10月13日(火)「邪馬台国フェスタ」於・アクロス福岡シンフォニーホール  
講演：「科学的視点からみた邪馬台国論争」